公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団セミナー

第5回環境シンポジウム

ディスカッションでは、アジア・オセアニアでの国際交流について熱心な意見交換が行われた

出席者

〈パネリスト〉
有森 裕子氏
島上 宗子氏
高野 孝子氏
廣冨 靖以氏

〈コーディネーター〉
阿部 健一氏

パネルディスカッション「相互理解から地球環境問題の解決へ」

阿部　最初は、有森さんの話を聞いての感想から。

島上　有森さんと私たちの活動に共通点を感じました。第1に、茶色の水道水に驚きながら、「生きる」のに必要なものは何かを考え直したということ。第2に、違うことを受け入れる。国際交流は違いをどれだけ楽しめるか―だと思います。第3に、人が育つ、人を育てるには時間が必要だということです。

高野　スポーツのポジティブな可能性に気づかされました。国の規模で変化をもたらした点

有森氏 粘り強いコミュニケーション

です。運動会が行われ、体育が学校の教科になり、健康にまでつながる。有森さんの個人的な魅力もあると思っています。

廣冨　この活動は有森さんが求められたのです。20年間で大きな活動になったことに感動です。当財団は環境問題という大きなテーマを取り上げています。志は大きいのですが、何ができるか常に悩んでいます。有森さんの活動の話を聞いてそれを目標として頑張っていきたいと思いました。

阿部　有森さん、4つの事例発表をどのように思われましたか。

有森　スポーツをなぜするのかは、社会で健康に生きていくための手段にしているだけです。スポーツありきの社会ではありません。4つの事例発表のストーリーはいろいろありますが、最終的に行きつくところは次世代の育成です。なぜ次世代を育成するかといえば、カンボジアの復興はカンボジア人によってなされることが大切だと思うからです。活動もそうです。問題があっての活動です。それを勘違いすると活動のために問題を探すことになります。この活動は自分たちしかできないのではなく、同じ目標を持っている人たちとは一緒にできるはずです。

阿部　スポーツはより良く生きるため―。まさに環境問題もその点で同じです。ところで、プロジェクトを続ける理由は。

高野　厳しい大自然の中、1人で旅をすると「人が生きるには何が必要」「本当に大事なものは」と思います。それを他の人と一緒に考えたいとヤップ島プログラムを始めました。答え

島上氏 「聞き書き」は世代間交流

廣冨氏 豊かになるための経済活動を

高野氏 共感力の育成が大切に

大切なもの自身で問う 阿部氏

があったわけではなくて、一緒に探したかったんです。

阿部　本当に大切なものは何かと一人一人が自分で問うていかなければいけないことだと思いますが。

島上　「聞き書き」は世代間交流であり、異文化交流です。自分が見えている世界だけで自分の生き方をこれだと決めつけてしまうと苦しくなる。違う考え方や生き方があることを知ると、視野が広がるだけではなく、自分の立ち位置が見えてくる。それが交流の一番大きな意義だと思います。

廣冨　今日、世界がつながっているという話がありました。環境問題では、日本が絡んでいないように見えても、経済活動と自然と環境が重なっていて、全てのことが日本人も関係しています。豊かになるための経済活動は必要です。日本は過去に公害問題も学習しました。それをどのようにアジア・オセアニアにつないでいくかがある意味、財団の今の事業の柱になっていると感じています。

阿部　人づくりで考えていることを。

有森　否定でもなく、叱責でもなく、与えられたチャンスとしてとらえ、粘り強いコミュニケーションで物事にあたる。それが人を育てることに一番当てはまる部分と感じています。

島上　かつては学校での勉強だけではなく、生きるために経験から学ぶ機会がたくさんあった。運動会が行われ、体育が学校の教科になり、健康にまでつながる。有森さんの個人的な魅力もあると思っています。

廣冨　この活動は有森さんが求められたのです。20年間で大きな活動になったことに感動です。当財団は環境問題という大きなテーマを取り上げています。志は大きいのですが、何ができるか常に悩んでいます。有森さんの活動の話を聞いてそれを目標として頑張っていきたいと思いました。

阿部　有森さん、4つの事例発表をどのように思われましたか。

有森　スポーツをなぜするのかは、社会で健康に生きていくための手段にしているだけです。スポーツありきの社会ではありません。4つの事例発表のストーリーはいろいろありますが、最終的に行きつくところは次世代の育成です。なぜ次世代を育成するかといえば、カンボジアの復興はカンボジア人によってなされることが大切だと思うからです。活動もそうです。問題があっての活動です。それを勘違いすると活動のために問題を探すことになります。この活動は自分たちしかできないのではなく、同じ目標を持っている人たちとは一緒にできるはずです。

阿部　スポーツはより良く生きるため―。まさに環境問題もその点で同じです。ところで、プロジェクトを続ける理由は。

高野　厳しい大自然の中、1人で旅をすると「人が生きるには何が必要」「本当に大事なものは」と思います。それを他の人と一緒に考えたいとヤップ島プログラムを始めました。答えがあったわけではなくて、一緒に探したかったんです。

阿部　本当に大切なものは何かと一人一人が自分で問うていかなければいけないことだと思いますが。

島上　「聞き書き」は世代間交流であり、異文化交流です。自分が見えている世界だけで自分の生き方をこれだと決めつけてしまうと苦しくなる。違う考え方や生き方があることを知ると、視野が広がるだけではなく、自分の立ち位置が見えてくる。それが交流の一番大きな意義だと思います。

廣冨　今日、世界がつながっているという話がありました。環境問題では、日本が絡んでいないように見えても、経済活動と自然と環境が重なっていて、全てのことが日本人も関係しています。豊かになるための経済活動は必要です。日本は過去に公害問題も学習しました。それをどのようにアジア・オセアニアにつないでいくかがある意味、財団の今の事業の柱になっていると感じています。

阿部　人づくりで考えていることを。

有森　否定でもなく、叱責でもなく、与えられたチャンスとしてとらえ、粘り強いコミュニケーションで物事にあたる。それが人を育てることに一番当てはまる部分と感じています。

島上　かつては学校での勉強だけではなく、生きるために経験から学ぶ機会がたくさんあったと思います。経験から学び、それを言語化する力を育てることが大切と思っています。

高野　共に生きる姿勢。それに必要なのは、英語でいうとエンパシー、寄り添う心。そういう共感力を育てることが人づくりには大事と思っています。

廣冨　事業分野で言えることは現場が育てると思います。場所に行って、現実の厳しさを見て感じて、どのように変わっていくのか。これが一番人間を育てる力になるのではないかと思っています。

阿部　最後に一言。

高野　人は一人では生きてはいけません。他の人々もそれぞれのところで踏ん張りながら、地に足のついた活動をしています。それを思うだけでも、希望と力になると思いました。

島上　人を育てることは時間がかかりますし、成果をこれだと示しにくい。長い目での活動が必要です。

有森　教育って教え育つと書きますが、私は基本的に人間同士、死ぬまで「共に育つ（共育）」という間柄であるという意識があれば、辞めることもないと思います。

阿部　国際交流、国際協力は考え続け、活動し続けなければいけないと分かりました。それを先人的に、先進的に試している人たちの話を聞けたのは、今日のシンポジウムの宝でした。ありがとうございました。

事例発表③

日本の「聞き書き甲子園」「聞き書き」をインドネシアで！

一般社団法人あいあいネット副代表理事
愛媛大学SUIJI推進室准教授
島上 宗子氏

自然への敬意など未来に

「聞き書き甲子園」は、日本の高校生100人が、森・川・海などの名人100人を訪ね、知恵、技術、生き方を1対1で「聞き書き」して学ぶ活動だ。この手法を、環境や生活様式が急激に変わってきたインドネシアのボゴールと中スラウェシで試みた。都市化が進んだボゴールに比べ、中スラウェシは自然豊かな農山漁村が多い。4年間の取組の結果、ボゴールのコルニタ高校は聞き書き研修を課外活動に取り入れ、自立した運営体制が整った。高校生たちは、「自然への敬意」「相手を尊重」「不可能はない」などを学んだと語る。時代が変わっても失ってはいけないものがある。それを未来につなげるのがこの活動の意義だと思う。

事例発表④

ヤップ島の環境保全の取り組みと交流プログラム

早稲田大学留学センター教授
NPO法人ECOPLUS代表理事
高野 孝子氏

寄り添える交流の継続を

活動の目的は「豊かさとは」を、未来を担う若い世代と一緒に考えること。ミクロネシア連邦のヤップ島で暮らしながら、私たちは他の生き物の命を奪い、自分の命を支えていることが理解できる。日本での暮らしからはなかなか実感できない部分だ。また、海面上昇が起こり、しかも日本の製品がゴミとなって堆積し、問題になっている。

今は、地球はひとつ。日本もヤップ島の過去と今に深く関わっている。地球市民として何ができるだろう。魚が減り荒れた海を守るため、地域グループがタミル地区の海域の一部を禁漁区にした。始まったばかりのプロジェクト。持続可能なタミル地区を目指す彼らの行動に寄り添える交流を続けたい。

主催　公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
共催　大阪府、大阪産業振興機構
後援　大阪市、大阪商工会議所、関西経済連合会、ジェトロ大阪、ＪＩＣＡ関西、りそな銀行、近畿大阪銀行、国際地球理解年・日本地域活動センター、産経新聞大阪本社

PR　〈企画・制作〉産経新聞社営業局

国際交流から考えるアジア・オセアニアの経済と環境保全

国際交流を視点に、アジア・オセアニアの経済と環境保全を考えるシンポジウムが11月21日、大阪市中央区のホテルで開催された。アジア・オセアニア諸国での調査研究を助成し、経済と環境保全の両立を支援する公益財団法人「りそなアジア・オセアニア財団」が主催。NPO法人ハート・オブ・ゴールドの代表理事で元プロマラソン選手の有森裕子氏が「スポーツを通じた国際交流」と題して講演。同財団が支援する環境事業の事例報告やパネルディスカッションも行われた。

■開会あいさつ
りそなアジア・オセアニア財団 理事長
廣富 靖以氏
（共英製鋼 副社長）

経済・環境分野でも自国中心主義が強くなる可能性が高くなっています。私たちはこれまで以上に自国利益だけではなく、他国に対する理解と敬意を深めて、真のグローバル化なりません。そのためには、国際交流・協調の視点に立った民間レベルの草の根的な活動の輪を広げることです。本日のシンポジウムは、アジア各国で環境保全に地道に活動している人々の声を聞き、持続可能な経済社会、豊かな社会の実現に向けて、〝いま何をすべきか〟を国際交流の観点から理解を深めたいと思っております。

■趣旨説明
人間文化研究機構総合地球環境学研究所 教授
（りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員長）
阿部 健一氏

過去の環境事業活動のシンポと同様に「経済（発展）と環境（保全）」を掲げました。この2つは矛盾や対立ではなく、目標は同じで、一人一人の〝豊かさ〟を目指すことです。平成24年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた国連持続可能な開発会議では「グリーンエコノミー」への移行が課題でした。この言葉には、「経済と環境」は2項対立ではないという意味が込められています。私たちは経済発展での物質的、利便性の豊かさだけでなく、自然の豊かさを含めた「真の豊かさ」を改めて考えなければなりません。

今回は、真のグローバリゼーション（地球規模化）を目指すために「国際交流」を取り上げました。地球規模化は地球が均質になることではありません。地球上には、さまざまな違った価値観や文化を持つ人々がいます。国際交流はシンプルで、お互い違っていることを理解し合い、その上でまず、自分ができる行動を起こすことです。当財団の環境事業は、まさにそうした活動のひとつといえます。本日は、有森裕子さんの基調講演や4つの事例を紹介し、相互理解から地球環境問題の解決へ具体的な議論ができればと思っています。

基調講演「スポーツを通じた国際交流」

NPO法人ハート・オブ・ゴールド 代表理事
有森 裕子氏（元プロマラソン選手）

違いを理解することが重要

カンボジアでの活動は、平成8年に開催された「第1回アンコールワット国際ハーフマラソン」の参加から始まりました。活動内容はマラソンを通して、対人地雷の廃絶や被害者の救済、子供の健康などの問題提起やサポートです。

第1回大会で現地に入ったとき、目に飛び込んできたのは物乞いする子供たち。生きるために、必死に向かってくる目がありました。そして、道端には地雷で手足を失った大人もいます。ここでマラソンができるのかと思ったのは事実です。大会がスタートしても3キロのコースを子供たちは300メートルで走るのをやめてしまいます。スポーツで交流し、問題提起するなどの発想にはなりませんでした。

さらに、宿泊したホテルでは水道水は茶色。しかもせっけんも泡立たない。しかし、4日もいると寝られさえすればよいと思うようになりました。子供たちの生きるための必死な目やホテルの状態を自問自答しました。最後には、私たちは生きていくための最低限を固定観念で決めつけすぎていると感じさせられました。

第2回大会ではカンボジア国内は政情不安。反目する時の権力者2人が300メートル、肩を並べて走りました。その姿が平和の象徴として全世界を駆け巡り、「大丈夫」という印象を与えたのです。子供たちは、昨年私たちがプレゼントした服などを身につけ、楽しい遠足を待つように目が輝いていました。ひとつのスポーツイベントが、国を含めてこれだけ人の表情や状況を変えられると感じたのです。

第18回までは私たちのNPOが主に大会を組織して、運営者育成や子供たちの育成などを行いました。日本のスポーツ関係者を含む多くの人が熱心に協力してくれました。ただ、事細かく指示されるのなら、全てやってくださいという現地の人の反発もあり、難しかったのは事実です。

大会をともに作る過程は簡単ではありません。言語、価値観、生命観が違います。スポーツのルールは同じでも、その他では彼らが思う正しさと自分たちが思っている正しさとは違うのです。違うものと接しているなかで「絶対にこうでなければいけない」や「アグリー（同意）がすべて」と思うと物事は進化しません。違いは理解しなければいけないと思いました。

マラソン大会も今年で21年目。参加者は645人から9150人。参加国も16カ国から85カ国になりました。第1回に参加した子供も30歳。私たちと一緒にカンボジアのために、スポーツを介して子供たちの育成、人の育成などに全力で取り組んでいます。今、私たちの中心的活動は子供たちが1人でも多くスポーツを通して、健康に健全に生きていける保健体育教育を広げることです。

私たちはマラソン大会6回目から青少年指導者育成スポーツ祭を開催しました。マラソンだけでなく、サッカーなどの日本のプロスポーツ専門家が現地の先生に教え、教えられた先生が子供たちを教えるプログラムです。このスポーツ祭を5年間継続した後に、体育教育がなかったカンボジア政府は、私たちに「小学校保健体育科学習指導要領」の作成協力を依頼してきました。私たちNPOと筑波大学、国際協力機構（JICA）の3者で小学校体育科復興事業をスタートさせ、指導要領を作成しました。この指導書で子供たちは体育教育を受け、体育祭も開催しています。現在は中学校の指導要領の作成に取り組んでいます。

カンボジアの体育科教育は技能、知識の習得だけではなく、協調性や態度を育成することが目標に掲げられています。学校で体育の授業が始まると子供たちの意識が変わっていきます。子供の変化が親に伝わり、結局社会に反映し、町が変わっていきます。体育教育が「豊かな心と健やかな体」の成長のために役立つと信じて活動しています。この活動はハード・ソフトの両面の支援が大事です。そのなかでも「人を育てる、作り出す」という国際交流、国際活動は絶対に欠かせません。ソフトの部分を育てる手段としてスポーツも非常に大事な役割をもっていると思っています。

事例発表①

オンギー川流域における自然環境保護と国際交流

モンゴル国オブルハンガイ県を事例に

大阪大学グローバルイニシアティブ・センター特任准教授　思沁夫（スチンフ）氏

違和感を交流での原動力に

モンゴルの現状は民主化以降、環境問題は大変深刻化している。今は鉱山開発、水問題などの問題に直面し、平成21年ころ、オブルハンガイ県のオンギー川が枯れ、湖も消失した。そのころ遊牧民環境保護組合代表のションホル・ネルゲイ氏に出会い、河川流域での環境保護活動を始めた。

地域の湿度などを維持する役割を果たしていた「白柳」を柵で囲い、家畜の被害から守る活動だ。今では7キロに及ぶ面積に広がった。次に実施したのが果実のなるサジーの栽培。採れた果実は家畜用飼料の資金にしている。国際交流では違うことは多々ある。その違和感を持ち続けるのではなく、原動力にすることだ。

事例発表②

インドネシア熱帯泥炭域

（中央カリマンタン州バランカラヤ地域）

森林と水環境の保全のための環境教育の提案と実践活動の支援

千葉工業大学名誉教授、新環境技術研究所代表　瀧 和夫氏

体感を通して環境学習を

活動目的は「水に浮かぶ森」といわれる熱帯泥炭域の森と水を守ること。活動の重要な柱は、将来を担う現地の若者や地域住民に系統的な環境教育を意識してもらうことにある。具体的には小・中学生を対象にした環境学習の実践支援や水質・大気・土壌などの実験テキストの作成支援。次に小中学生に環境学習を行う指導者の教育。最後に、大学生や市民が対象になるが、木材伐採後の土地・「市長の森」で、水質、魚、植生を調査し今後役立つ植物を育てる「グリーンキャンパスプログラム」の育成支援になる。泥炭地は少し掘れば水が湧き、かつ森の中に漁に行くという地域。このような場所で体感を通しての環境学習を進めている。